松村通信第１５１号

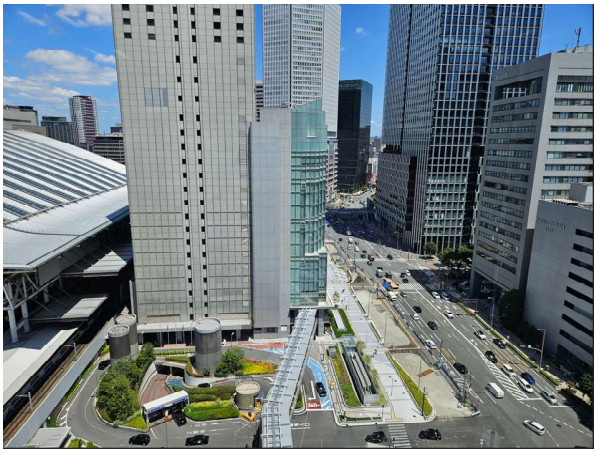
8 月 20 日
松村勝弘

「夏休み」

近況　今年の夏は暑い。毎年そう言っているような気もするが。調べてみたら、何年ぶりかの暑さにはちがいない。まいっています。

この暑さのなか、8 月 5 ～ 7 日まで、毎年参加している「会計学サマーセミナー in 九州」で福岡まで行っていた。この研究会は元立命館大学の先生であった、そして私が私淑しているＴ先生が九州大学に移られてから、大学院の夏合宿として始められたものが、毎年拡大し続け、全国の研究者が何十人も集まる研究会となっている。先生は 94 歳になられたという。参加者のなかでは私はもはやほぼ最高齢者となっている。最終日には先生を囲んでの懇親会に参加して、昔懐かしい話を、先生とした。

帰って翌日の 8 日には大阪で RIMO メンバーの喜多さんの会社の「役員会」（本社の JP タワー大阪への移転祝賀会のビデオ撮り）で、大阪に出かけた。立地は最高で、下の写真に見るように、JP タワー 12F 南西角、左に JR 大阪駅、右に阪神百貨店、向かいに大丸とグランヴィアがある。



終了後の懇親会は JP タワー大阪ステーションホテル「鉄板焼　瑞」で行われた。この立地も最高で、JP タワー 29 階で、正面に淡路島、右寄りに明石大橋が見るという贅沢なものでした。下の写真からはやや見にくいかも知れません。

九州から大阪まで 4 日間飲み続けで、研究会も疲れたが、こちらも疲れた。来週 23 日は毎年恒例の MBA1 期生の岸保君や何期生だったかの Y 君、学部ゼミ卒業の A 君らと広島阪神戦観戦だ。終了後は例によって、懇親会となる。毎年趣向を変えてくれる。楽しみだけど、飲み過ぎに注意、だ。しかも今年は、翌日 24 日に静岡県校友会で「講演」をしなければならない。学部ゼミ卒業生の N 君が静岡県校友会の幹事をしているので、彼が頼んできたのだ。もちろん終わったら懇親会である。私はかつて立命館大学校友会副会長をしていて、各都道府県の校友会総会に挨拶に行き大学の近況をしゃべったが、卒業生が喜んでくれて、やりがいがあった。そして恒例の 2 次会であった。嫌いではないが疲れる。そういえば、9 月 16 日には元 RIMO 副会長の S さんの RIMO 虎の会で阪神ヤクルト戦も観戦予定だ。

こんな「夏休み」で、暑さにもまいるけれども、楽しみもあって、「充実」している。

夏休みの自由研究　先にも述べた「サマーセ

ミナー」で、親しくなった東大教授大日方氏がよく使う言葉だが、そんな研究、夏休みの自由研究にすぎないという言葉、胸に刺さるけれども、好きな言葉だ。そういう意味でいうと、この暑さにまいりながら、雑読をしているが、それの「感想文」のようなものを書いてみたい。まさに「夏休みの自由研究」だ。

チョンキンマンションのボスは知っている

MBA 修了生の T さんのフェースブックで紹介されていた本、小川さやか『チョンキンマンションのボスは知っている　アングラ経済の人類学』（春秋社、2019 年）の紹介をしておこう。小川先生は立命館大学先端総合学術研究科の教授である。写真で見ただけだ

がチャーミングな先生である。でも、相当「物好き」でもある先生だ。何せ、アフリカまで出かけて現地住民のなかで生活して資料を収集するというタフな文化人類学者でもある。

この本は、香港にあるチョンキンマンションという、ホテルというかアパートというか、そんな巨大雑居ビルに住んでいるボスであるタンザニア人を頼って、彼女自身が香港に住んでみて、収集した様々な話題を展開しているルポルタージュというか、エッセイである。そして「『魔窟』とさえ呼ばれるこのビルを舞台に、アフリカのタンザニアから一旗揚げようとやってきた商人やブローカーの姿を描くのが本書だ」[1]。香港にあるタンザニア人の助けあいのネットワークがじつに見事に描かれている。ある書評氏はこれをうまく紹介している。

タンザニア人ネットワーク　「タンザニア人の香港におけるネットワークは、密接で濃厚な助け合いの精神に満ちているように見えて、実はお互いを『信頼できない』と言い切る人たちの集まり。信頼できないと言いながら、自分の部屋に見知らぬ若者を泊め、食事を奢り、お金まで貸す人々のネットワークというのが、あらゆる常識を裏切る存在。

タンザニアメンバー（ネットワーク）は次々に入れ替わり、誰かの面倒をみたからといって、直接の見返りが得られないことも多く、また直接の見返りを求めることもしない。このネットワークがどうやって作られているのか、とても不思議。日本の同郷意識とも異なり、あくまで貸し借りの関係」[2] だという。そしてさらに「信頼関係もなく、見返りもない。それでも互いに助けあうのはなぜか？タンザニア人の助けあいの仕組みが本文中にこう記載されています。

『誰もが「無理なくやっている」という態度を押し出しているので、この助けあいでは、助けられた側に過度な負い目が発生しないのである』［小川 85 頁］

『他者の「事情」に踏み込まず、メンバー相互の厳密な互酬性や義務と責任を問わず、無数に増殖拡大するネットワーク内の人々がそれぞれの「ついで」にできることをする「開かれた互酬性」を基盤とすることで、彼らは気軽な「助けあい」を促進し、国境を越える巨大なセーフティネットをつくりあげているのである』［小川 263 頁］」[3]。

負い目を感じない再分配　これを小川さやか氏はこう整理されている。

「人類学者の小田亮はかつて『贈与交換』『分配』『再分配』『市場交換』という四つの交換のタイプを『負い目の刻印の存在形態』に着目して、次のように整理した。贈与交換は負い目を持続させ、分配は負い目を曖昧なものにし、再分配は負い目を返済できない無限のものとして永続させ、そして市場交換では負い目を消去する。対等な主体同士の贈与交換は、持続的な機械的連帯をつくり、中心と周辺の間の再分配は持続的な有機的連帯をつくる。そして遊動社会に特徴的な分配はその場限りの機械的連帯、市場交換はその場限りの有機的連帯をつくる。

市場交換と再分配の相補的な関係こそが、

資本主義経済と近代国家の共犯関係である。これに対抗するオルタナティブとしては、贈与交換や『コミュニティ』[共同体]が注目されがちである。だが、香港のタンザニア人たちの社会的な世界は、市場交換と分配との相補的関係で成立しているようにみえる。彼らのあいだで、贈与された人が贈与してくれた人に返済するという贈与交換の関係を維持するのは難しい ── 明日にはどちらかが帰国したり新天地へ移動するかもしれないし、不法滞在や不法労働の罪でお縄になってしまうかもしれない。輪郭を持った安定的なメンバーシップが築けず、権威を持つリーダー不在の彼らのあいだで、メンバーからの貢献を吸い上げ、適切な再分配を実行するのも難しい。適切な再分配を可能にするような機能は SNS にはない。彼らのやり方としては、原理的には、その時に偶々(たまたま)狩りに成功した者がその他の者たちへ肉を分配し、また別の日には別の偶々狩りに成功した者がその他の者へ肉を分配するという狩猟採集民のように、偶々取引を成功させた者、偶然に「ついで」の機会を得た者が、偶然に必要とする者の要望に応えていくことで、輪郭の曖昧なネットワークのなかでモノやサービス、チャンスを回していくものとなっている。」(159-160 頁)

この本を読んで、市場経済か共同体かという二分法だけでなく、いろいろな組み合わせが考えられるのがわかった。もう少し考えなければならないと思わせられた。

文化人類学者小川さやか　小川さやか先生がどんな人か、さらにいろいろな文献を読んでみたいという誘惑にかられている。先生がどんな人か、どんな考えをもっているのか、さらに深めたいと思うが、ネットでもその一端を知ることができる。以下を紹介しておきたい。

①小川さやか「〝ままならない”社会を楽しむフィールドワーク術」
（ https://www.youtube.com/watch?v=HQQ-9qY50Ww）

②小川さやか「ズル賢さの哲学みたいなものが、私を変えた」
（https://www.youtube.com/watch?v=NtdgGME-9Gg）

筋肉坊主のアフリカ仏教化計画　夏休みの自由研究その 2 として、石川コフィ『筋肉坊主のアフリカ仏教化計画』(春秋社、2024 年)をあげる。最近、オフィスの近くにある、京都市の中央図書館をよく利用する。そこにあったのを手当たり次第に読んでいるという状態だ。この本もそうだ。まともな職歴もない高卒ほぼ無職の男性が一流商社の支社長代行として危険な軍事独裁政権末期のナイジェリアに赴任した 2 年間の話である。高卒フリーターであった著者が、アフリカでの布教活動をしているという筋肉坊主さんと知人の紹介で面識を得ます、筋肉坊主さんから「義理の弟が働いている日本を代表する一流商社 M でナイジェリア支社長をやらないか」と誘われる。しかし、実際に面接に行ってみれば、けんもほろろに門前払いされる始末。その後、何の奇縁か、他の志望者が全員辞退するという事態が発生し、支社長代行として採用される。仕事内容は「生きて帰ってくること」…赴任するナイジェリアは当時政情が不安定で、命を惜しんだ他の志願者全員が辞退したからだ。本書は、そんな経緯で 1998 年から 2000 年までナイジェリアに滞在することになった著者の紀行文だ[4]。興味深い話満載で、一気に読んでしまったが、著者の後任がなかなか決まらず、帰国が若干遅れたという。危険満載のこの国で、真面目に仕事をしようとする人は、すぐにやめてしまうし、やめてしまったという。著者は「テキトー」にやったから、任期を全うできたという。読まないとわからないだろうが、大変な国で、それなりに楽しんだ様子が面白おかしく書かれていた。著者は帰国後アフリカン・バー＜トライブス＞を開業され、現在も営業中だという。

ただ、アフリカ仏教化計画は進んでいないようだ。ユダヤ教、それから発したキリスト教、さらに遅れてそれから発したイスラム教といった一神教の窮屈さから仏教が救ってくれるという期待もある。儒教などにも期待したい。ま、自分で深めなければならないのだ

が。

日本の方言地図　夏休みの自由研究その 3 は、徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書、1979 年) だ。人や生物の存在を表す際「全国の[方言]分布は非常に単純で、東日本のイル類と西日本のオル類とが東西の二大対立を成しており、そして紀伊半島南部にアル類の領域がある。イルとオルとの境界線は、ほぼ新潟と富山、長野と岐阜、静岡と愛知の県境付近を走っている。……この境界は、新潟西端の糸魚川市と静岡の浜名湖を結ぶ線上にあるので、『糸魚川・浜名湖線』と呼ばれることもある。糸魚川の西方にはかの有名な難所『親不知』があり、長野と岐阜との県境には日本アルプスの峰々が連なり、また静岡西部には天竜・大井・安倍・富士等々、有数の河川があって人々の往来を妨げた。これらの自然の障壁が言語の境界として作用することは当然である。」(10 頁) これは納得できる。さらに、「東と西にＡ語形、中央にＢ語形のようにＡＢＡ型の分布を示す……。この分布について、言語地理学では……かつてはＡの分布は地理的に連続しており、その後生まれたＢがＡの分布を断ち切ったものと推定する。また、ＡＢＣＢＡ型の分布があれば、同じ原理によって、最初に生まれた語形はＡであり、次に生まれたＢによってＡＢＡ型の分布が成立し、さらにＣの発生によって現在の分布が生じたと解釈する。」(7 頁)

イエかウチかの分布も考えさせられる。「方言の分布は非常に単純であって、……大部分がイエかウチである。ウチはほぼ関東・中部に集中し、その両側の地域はイエである。すなわち、イエは典型的な周圏的分布(ＡＢＡ型分布)を成しており、分布からはイエ（A）がウチ（B）よりも古いと推定される。つまり、一昔前には関東・中部でもイエであり、のちにウチが発生して周囲に広がったと考えるわけである。」(22 頁) ただ、これがいつ頃からそうなったのかがわからない。直感的に少し新しい感じがする。

これらはすべて経験上からも納得できる。かねて、そういう分布になっているのではないかと思っていた。京都大阪で話されていた言葉が、地方に伝播し広がっていったが、その後京都大阪で新しい言葉・表現が使われ出たし、徐々に地方に伝播していくからこうなるわけだ。地方に行くほどかつての言葉・表現が方言として残るというわけである。これは方言周圏論といわれている。私は古い言葉を落語などで知っていたが、今はほぼ死語となっている言葉が、わが女房の田舎で使われているのに出会ったことがある。「おとがい」という言葉だが、それはあごではなく、あごの先っぽのことである。私は古い落語で知っていたが、それが現在も使われているのに驚いた。考えて見れば、上の方言地図からすれば、そういうことがありうるわけである。

この本ではアクセントの話は出てこないが、アクセントはもっと広がりにくいのではないかと思っている。単語は広がりやすいが、アクセントはなかなか広がらないのだと思う。アクセントで言うと、関西弁が極めて狭い範囲でしか話されていない。京都府でも丹後へ行くと、アクセントは関西弁ではない。もともと関西弁ではないアクセントが、どこかから関西に降りてきたけれど、これがあまり広がらなかったのではないかと、かねて考えていた。では関西弁はどこから降ってきたのか。これは最大の謎だ。誰か究明してくれないものだろうか。天皇制と関係ありそうだがわからない。

1) 東京新聞ウェブ「著者は語る」2019 年 9 月 29 日（https://www.tokyo-np.co.jp/article/3685）

2) 3) 安渕聖司「人類学書『チョンキンマンションのボスは知っている』から「助けあい」の本質を知る」『KOKUYO フックレビュー』2023.01.31（https://www.kokuyo-furniture.co.jp/solution/mana-biz/2023/01/post-682.php）。

4) https://note.com/dilettare/n/nbe9b87cfea7b

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。